

## オオカミが来た!? ②

宗像 充

ルポライター

目撃者たちは口をそろえて「あれは大ではない」と言う。仮に彼らが見たものを「ニホンオオカミ」だとすると、いったいどうやってほかの動物と見分けるのだろうか。

ニホンオオカミとは何か?——これが難しい。人々の前に姿を見せなくなったのは一〇〇年近く前で、ニホンカワウソや九州のツキノワグマと違って、写真も映像も、他地域の生きた個体もない。おまけにオオカミといえばイヌと間違えやすい。同種か別種かの議論はあっても、ニホンオオカミがイヌ科動物であることは誰も否定しない。そもそもタイリクオオカミとニホンオオカミは、どの程度違うのだろうか。

「形態」体長九五〜一一四センチ、尾長三〇センチ、肩高約五五センチで、中形の日本犬ほどである。胸郭はイヌのそれよりも幅が狭く、深い（上下の高さが高い）と言われている。（略）《特徴》オオカミ類中最小の種の一つで、特に四肢と耳介が短い。しかし、四肢の長さは長脚のイヌと大差なく、日本在来イヌよりははるかに長い。すなわち、前肢の肘までの高さは、肩の端より座骨の端までの長さの二分の一位。体毛は長く、タン色を帯びたベージュ色、頸・背・体側・尾の毛は先端がわずかに黒い。上下唇と頬は白色に近く、耳介後面は赤茶色、前膊下部前面に焦茶色の斑紋がある。頭骨は短小で吻は広い。」

この事典の記述は、科博の研究員を長年務め、二〇〇七年に亡くなった今泉吉典が一九六〇年に刊行した『原色日本哺乳類図鑑』で挙げた特徴を抜き書きしたものだ。吉典はニホンオオカミ研究の権威で、忠明の父にあたる。科博の展示室には、少し離れたところにタイリクオオカミの剝製もある。大きさでは大人と子供ほどの差がある。ニホンオオカミは「四肢と耳介が短い」とい

## 国内に三体の剝製

日本国内には、東京・上野にある国立科学博物館（科博）と東京大学農学部、それに和歌山大学（現在は和歌山県立自然博物館）に三体のニホンオオカミの本剝製がある。

科博地球館の大展示室で、ニホンオオカミの剝製は自由に見ることが出来る。退色が進み全体的に白っぽく、中型のイヌくらいの大きさだ。「イヌです」と紹介されれば、「変わった犬だな」と思うかもしれない。ニホンオオカミの特徴を、一九九五年に動物学者の今泉忠明が著した『絶滅野生動物の事典』から引用す

われてもピンと来ないが、耳の目立つタイリクオオカミと見比べるとよくわかる。科博の剝製を見ても、今泉吉典の挙げた特徴と「共通する部分もある」という程度しかぼくには言えない。

国内の三体の本剝製を見たほうが、ニホンオオカミの特徴を挙げるとするならば、言葉足らずは否めず、大きさ一つとっても、科博のものは小さいけれど、和歌山大学のものは中型のイヌ以上の大きさだ。オスやメスの違い、大人と子供の違いを考慮すれば、わずか三つの剝製で云々すること自体が難しい。毛の色にしても夏毛と冬毛で違うだろうし、退色もある。昔の文献から大きさ程度なら補うことはできる。しかし自分で測ったわけでもない。耳の大きさや位置、尻尾の形など、最大公約数的に特徴を挙げてみても、じゃあそれに当てはまらなければ別の動物となるのだろうか？

そこで必要となるのが、物差し<sup>①</sup>で、その物差しとなるものを分類学では「タイプ標本」と呼ぶ。ニホンオオカミの「タイプ標本」が、実はオランダのライデンにある。

ぼくはライデンの標本を実際に見たことはない。しかし写真を通して見る限り、先ほど引用した特徴はラ

